



年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

家族

今週の福音朗読は「十二人を派遣する」という場面が選ばれました。この派遣の箇所、しばしば私自身が派遣されてきた歩みを思い出させます。また、一週間遅れになりましたが、7月3日中田神父の聖トマスの霊名を皆さんにお祝いしていただけることに感謝します。

私は助任司祭として二つの教会に、主任司祭として四つの教会に赴任してきました。「二人ずつ組みにして」(6・7)という派遣ではありませんでしたが、「杖一本のほか何も持たず」(6・8)の通り、予備知識も持たず、変な思い込みも持たずにどの教会にも赴任しました。

朗読で言われている「杖」は、当時夜道で身を守る唯一の道具であったし、羊飼いの身分を表すしるしでもありました。するとイエスが持つのを許可した「杖」は、「他は手放せても、これだけは手放せないもの」ということでしょうか。そういう意味では、私の「これだけは手放せない一本の杖」は「大司教様の任命書」だったかも知れません。

他のもの、書物や乗り物や身の回りの品は、どんなに高価な物でも手放そうと思えば手放せる品物でした。いちばん感じたのは、釣り道具は土地が変われば以前のものはほとんど役に立たないということです。

「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。」(6・10)一度だけ、この戒めに背きました。伊王島の馬込小教区に赴任してすぐ、司祭館を建て替えてしまったのです。大島崎戸の太田尾小教区を出るときに馬込小教区の辞令を受けましたが、早速地区のある先輩から「あそこの司祭館は建て替えないといけないよ」と聞かされました。

しかもその先輩は(すでに亡くなっていますが)口だけでなく、帯封のついた建設資金も渡してくださいました。馬込教会司祭館は今思うと「建て替えありき」で住み始めたのでした。司祭館は建て替えましたが、もちろん旅立ちのその日までとどまったことには間違いありません。

「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。」(6・12-13)私はと言うと、悪霊を追い出せたかは分かりませんが、「あの病院に入院したら退院は難しい」と言われた入院患者を長年見舞って、退院の日を見ることが出来たケースもありました。もう一方の「油を塗って多くの病人をいやした」これは確かです。イエスに権能を授けられて働いたこの三十年で、何度も実感しました。

何かしらの結果を出したとは思いますが、しかしそれは、いつかは司祭の手を離れていくものです。なぜなら、司祭はいつも「その土地から旅立つときまで」を全力で働いているからです。もし何らかの結果が出たとしたら、それは権能を授けてくださったイエスのおかげであるし、働きの報いは信徒皆さんのものです。

百周年の報いも信徒の皆さんのものだし、新型コロナで幸いにして

感染者を出さずにここまで来たのも役員を始め信徒の皆さんが覚悟を決めて協力してくれたからです。そして許されることなら、耐震補強工事も見届けたいと思っています。幸い田平教会の役員は、これまで赴任してきたどの小教区よりもすぐに動き、よく働く方々です。平戸地区でも自慢できますし、教区でも指折りの役員たちだと思っています。

ところで、「派遣される司祭と、教会共同体の関係」について最後に考えてみましょう。修道者の派遣も、同じように当てはめながら考えてほしいと思います。派遣される司祭は、さらに大きな器に支えられて派遣されていきます。その器とは、教会共同体です。

中田神父は小学校を卒業して神学校に入りました。それから14年間、「鯛ノ浦教会」という教会共同体に支えられてきました。大神学校に入ってから、私一人の選んだ道ではなくなってきました。小教区報で神学校の様子をお願いされて書くと、時折信徒の人から「神学生さんの書いた記事を読みました。応援しているので頑張ってください」と言われることがありました。

さらに上級生になってスータンを着る頃になると、巡回教会で子供の黙想会のお手伝いをして、巡回教会の信徒から「お祈りしているので頑張ってください」と言われることもありました。本当は休暇を終えて神学校に戻るとき、「帰りたくないなあ」と思うこともありました。そんな時に思い出していたのは、鯛ノ浦教会、また巡回教会で声かけをしてくれた「あの人この人」のことでした。以前話した「タクシー代」を手渡してくれた人もその中に含まれています。

この「鯛ノ浦教会の共同体」が、神学校への「派遣」に背中を押してくれた、「器」でした。そして司祭となって、初めての場所に赴任するときの「支えとなった器」でした。この支えとなってくれる器は、派遣を繰り返し受けていく中で、さらに大きな器になっていきました。二度目の助任司祭の時は鯛ノ浦教会と浦上教会という器に支えられて滑石教会に派遣され、初めての主任司祭の時は故郷の鯛ノ浦教会と、助任としてお世話になった浦上教会、滑石教会の支えのもとに、主任司祭の第一歩を踏み出したのです。

田平の神の家族も、これまでたくさんの司祭と修道者を日本の教会に送り出してきました。田平の神の家族は、出身司祭修道者たちが新しい派遣を受ける度に、支えとなっている大きな器、その原点なのです。

私は、派遣を受けるたびに、これまでお世話になった教会共同体の支えを思い出します。個別の信徒の名前は思い出せなくなるかも知れませんが、大きな支えを背中に受けて今があることを知っています。皆さんも、弟子を派遣する福音朗読を目にするとき、田平教会が支えている人が今も元気で、神の国のために働いてくださいと、お祈りをしてほしいと思います。派遣の後ろには、教会家族の支えが必ずあるのです。